

『片恋～難攻不落の恋人～』

著:あすか

ill:実相寺紫子

狭霧はカクテルグラスをテーブルに置き、冷えた目つきを悠護に向けた。けれど、悠護はまったくこたえないのか、笑顔を崩すことなくなおも話しかけてくる。

「あんたも狭霧も駄目、じゃあ、『サギリン』はどうなんだよ？ 可愛いニックネームがついてたら、親しみが湧いていいだろ。それに耳触りいいぜ、サギリンってさ」

悠護に興味などない狭霧には、人懐っこくまとわりつかれることが、鬱(うつ)陶(とお)しくて仕方がない。

「サギリンは絶対に使うな。いいな」

「怒らせる気はなかったんだけどなあ……はは、やっぱ嫌か～サギリンは」

あははと笑っている悠護には悪びれた様子もない。

狭霧はいくつかの店と契約して、ピアノの演奏をしている。この店では、演奏後にドライマティーニをカウンターで飲むのが一日の終わりを告げる儀式になっている。けれど悠護の登場により、ここしばらく日々のペースを乱されていた。

「なあ、せっかく綺麗な顔してるんだから、そんなふう眉間に皺(しわ)寄せたら台なしだぜ」

あっけらかんとした悠護の言い方に、狭霧はさらに苛立つ。

「オーナー。悪いがもう帰るよ」

狭霧は、カウンターの中で、ボーイと話していたオーナーの佐(さ)々(さ)木(き)圭(けい)二(じ)に声をかけ、席を立つ。すると隣にピッタリと座っていた悠護が、狭霧を追うように顔を上げ、不思議そうに首を傾げた。

「え、もう帰っちゃうのか？」

「君には関係ないことだ」

そう言って背を向けると、背後から「今晚も振られちゃったよ……」という悠護の声とため息が聞こえてきた。それでも狭霧は振り返ることもなく、店を後にする。

「狭霧、ちょっと、待ちなさいよ」

店の前でタクシーに乗り込もうとした狭霧のところへ、圭二が駆け寄ってきた。

圭二は髪を短くカットし、金色に染めているのでよくファッション関係者に間違われるらしい。しかも、明るい色彩のシャツにピッタリしたスラックスといったスタイルを好んでしているためか、三十一歳という年齢よりかなり若く見られる。

「忘れ物でもしていたか？」

「そうじゃなくて、悠護ちゃんは狭霧と話したいからもう一カ月も通ってるのよ。せめて普通に話してあげたらどう？」

圭二は狭霧が演奏をしているレストランの一つ、『マルリー』のオーナーだ。マッチョな男には目がない、おかま。一見弱々しく見えるが、実は空手の有段者だ。しかも、経営手腕に優れており、他にもレストラン三軒、クラブバー二軒を経営していて、狭霧はいくつかの店で演奏を任されている。

「あれを出入り禁止にしてくれないか？」

「一応、彼はお客さんなんだから、そんなのできるわけないでしょう。ねえ、そんなに悠護ちゃんは気に入らない？ 私はいい子だと思うけど」

「興味はないな」

一カ月ほど前、狭霧は『マルリー』で悠護と出会った。

狭霧は定期的に行われているピアノの調律に立ち会っていたのだ。そこへ友人の結婚式の二次会の場として『マルリー』を選んだ悠護が打ち合わせにやって来た。その日から毎晩、飽きることなく悠護は『マルリー』を訪れては、狭霧にまどわりついてくる。

今までもこういう輩(やから)がいなかったわけではない。自分ではそれほど自覚はないのだが、狭霧の顔は彫りが深く、少し日本人離れした容貌をしていると言われる。一重の目に豊かな睫(まつげ)、フェイスラインは卵形をしているが、顎(あご)が少し尖っているため、冷たい印象を与えてしまうようだ。

また、肌は男性にしては白く、体格はかなり細身だが、別に病弱ではないし、か弱くもない。

「狭霧、フリーよね」

「確かに」

「だったらいいじゃない。それとも、まだ、克(かつ)俊(とし)のこと待ってるとか言わないわよね？」

カメラマンの一(いち)ノ(の)瀬(せ)克俊とは二年前に別れた。

別れたといっても、嫌いになったという理由からではない。

「だいたい、好みじゃない」

悠護のように、誰とでも気さくに話せる人間は、他人の心に土足で踏み入るタイプが多いのだ。

強引かつ勝手に話を進めるところも、狭霧には気ぜわしく感じる。

「なら、友達くらいにはなってあげなさいよ」

「……」

「別れた男を想って待つのは構わないけど、他の誰かと話したり、遊びに行くのは罪じゃないし、裏切りでもないわよ。だって、狭霧はフリーなんだから」

「そうだ」

確かに狭霧はフリーだ。

互いに待つことはしない。以後、誰に縛られることなく、恋愛は自由にすると決めて、克俊と別れたのだ。だから狭霧も、渡米した克俊も新しい誰かを選び、誰と暮らそうと構わない。

けれど、狭霧は克俊を待っている。待ってはいけないという約束はしていないのだ。

「フリーなのに悠護ちゃんは嫌なの？」

「オーナーは随分と彼に肩入れしているんだな。実はオーナーが気に入ったとか？」

「そんなんじゃないわよ。だって私はマッチョな人が好きだから、悠護ちゃんはストライクゾーンに入らないの。もう、私のことはいいのよ。狭霧のことを話しているんだから。あんな身勝手な、自分のことしか考えない男なんて待つのはやめて、自分のことを考えなさいって言ってるの。だからって、悠護ちゃんを推してるわけじゃないわよ」

克俊の夢は優れたカメラマンになり、いつかピュリッツァー賞を得ることだ。大きな夢であり、取れるかどうかなど誰にも分からないが、克俊はそれに向かって日々、努力

しているらしい。

これでは、いつ帰国するか分からない。いや、戻ってこない可能性のほうが高い。「ありがたいとは思ってるが、心配してくれる気持ちだけでいい」

狭霧はそこでようやく微笑した。

克俊と圭二は高校の同級生であり、親友だ。狭霧に克俊を引き合わせたのも、圭二だった。だから余計に狭霧を心配するのだろう。

「じゃあ、悠護ちゃんは嫌？ 眼中になし？」

「そうだ」

「でもね、このままじゃあ、ず〜っと、悠護ちゃんは狭霧につきまとうわよ。困らない？」

「大いに困る」

せっかく一人でカクテルを愉(たの)しもうとしている狭霧の隣に座り、ベラベラと話しかけてくる悠護の存在に、いい加減うんざりしている。ずっと冷たい態度をとり続けているのに、めげない悠護のような相手は初めてだった。

「狭霧、こういうのはどう？ とりあえず一カ月付き合ってみるって提案するの。その間わがまま全開でこき使うのもよし、嫌な人間を演じてもいいし。あっ、いい顔をしておいて、唐突に思いきり振ってやるとか、どうかしら。そこまでしたら、悠護ちゃんも諦めるんじゃない？ ああいう子は痛い目に遭わないと絶対、諦めてくれないわよ」

この一カ月の間、休まず毎日『マルリー』にやってくる悠護だ。今までもさんざん、冷たくしてきたのだが、まったくこたえていない。これではいつまで経っても悠護は狭霧につきまとうだろう。

「……確かにね」

「本当に構われたくないって思ってるのなら、こちらからも何か仕掛けないと」

「オーナーの言ってることは分かるが、私にはそういうことはできない」

別に悠護に対してなんの感情もないが、だからといって、相手を弄(もてあそ)ぶようなことをしていいわけなどない。

「じゃあ、ず〜っとつきまとわれていいのね」

「困る」

「ねえ、さっきから堂々めぐりよ」

「分かっているが……」

「もう、仕方ないわね。私がお膳立てしてあげるから、まかせておいて。じゃあ、また明日」

ポンと狭霧の肩を叩くと、くねくねと腰を揺らしながら、圭二は店へ戻っていった。

本文 p13~21 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>